

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑤

水沼 昭子

「画用紙で作った「しっぽ」をつけた年長のAの姿が目に入る。もう数日続いている。簡単には「それ、なあに？」と聞けない様な、遊びへの熱中した姿。私の問いかけで遊びが終ってしまいそうで、ただ見守った。「しっぽ」の他にAの背中にドラゴンの羽根の様な紙切れがセロテープで止められた時、思い当ることがあった。

数週間前の園文庫の貸し出しの日に「字がいっぱいの本がいっぱいだけ——」とのAの願いを受けて『エルマーのぼうけん』を紹介したのだ。もしかすると今のAは、あの物語の中の「りゅう」……。Aに思いきってたずねる。私の問を途中で遮る様に「そう、りゅうだよ、せんせいもわかったの？」。Aの表情はそのことばを何倍もふくらませている心の中をみせて、私に向けられた。そう言えば、この一週間、急にAの言葉が強くなって威圧的なのが気になっていた。降園時、門のところで見送る私に「せんせい、ちゃんと門をしめなきゃだめだぞ」、又、友だちを従えて命令している姿を担任も

どうしたのかと気にしていた。——Aは「りゅう」に、物語に、入り込んでいた様だ。

そうしている内に、Aの仲間のYが、今度は画用紙で作った「リュックサック」を背負って遊びはじめた。画用紙に茶色のクレヨンで描かれ、幅の広いベルトでちゃんと肩から背中へかけられるリュックサック。Yはエルマーなのだ。Yの表情が何ともステキな「エルマー」を感じさせる。「あのね、ほら、七色のあめでしょ。輪ゴムでしょ。ガムも、ほら、ジャックナイフもあるんだ！」Yのズボンのポケットは「リュックサックのポケットに変身して、次から次へ、エルマーの持物を出して見せる。年長では小柄のAの「りゅう」の背中に乗って、エルマーのYはテラスを行ったり来たり。小柄のAが大きく感じられる。

この遊びには一つの約束事がある、図書室から『エルマーのぼうけん』の本を自分のクラスへ持ってくる事がこの遊びのはじまりとなる。二人は本を開き、ある日は「しっ

ぼが青と黄にぬられ、"りゅう"はますます物語の"りゅう"に近づいて行く。"本"をテーブルに置いて始まる、その遊びを思い思いの格好で見たり、関わったりする仲間達。その仲間に見守られて、毎日毎日"エルマーのぼうけん"ごっこが演じられた。遅刻寸前の登園が常のYを、毎朝待って、登園門にYの姿をみつけると大声で迎えるA。こうした

二人の関わりの中で、"エルマーのぼうけん"の毎日が続く。

「先生、今日で終ったよ、エルマーのぼうけん、みんなやっちゃったんだ」「今度は"エルマーとりゅう"あの本、たくさんあるから大変なんだ」。AとYは本のページを次々と繰りながら、物語へ入り込んで遊ぶ。テラスは広い海原であり、部屋の隅は、かの"どうぶつ島"。彼らはイメージをふくらませて、『エルマーのぼうけん』を体験した。

Aの"しっぽ"をみつけた日から三週間余り、彼らの遊びのすぐ近くで見守りながら、彼らの遊びの中に、口や手を出して行きたくなる思いを苦勞して押えた。紙のリュックサックを布にして本当に七色のキャンデイがでたら楽しいに違いないとか、小道具を頭の中で整えてみたり、AやYの遊びをもっと拡げてやりたいと考えていた。二人の遊びのイメージに割り込みそうになる"先生の思い"を押えて来た。Aたちのイメージの拡がり、大きな世界へ、物語の中へ入り込んでいる。その拡がりを、今は、そのままに受けとめてやること

がなんとむずかしいのだろうと、自分の心の硬さを感じた。ある遊びを共通の活動にとか、意図的にクラスの中へ——との思いが頭にうかぶ。AとY、二人の遊びを皆でしたら、もっと楽しいはず……と云う思いになる自分をみつめて来た。どんなに丁寧な計画で子供達の前に、それを出したとしても、今のAやYの感じている楽しさには及ばないだろう。

「せんせい、大変なんだよ、こんどはエルマーとりゅうなんだよ……」と輝やいた表情はみられないだろう。

Aたちの遊びの日々を大切にしながら、クラスの仲間の共有出来る体験を願って担任は少しずつ、『エルマーのぼうけん』をクラスで読みはじめた。劇あそびへ……などの思いではなく、静かに読み聞かせがはじまった。

本との何気ない出会いが遊びのイメージを拡げた。「先生、『エルマーのぼうけん』の最後はネ、"エルマーりゅう"に会う"なんだよ"五月の遠足で歩きながらAが私に話してくれたことを思い出す。あの頃から彼の心の中は、あの物語でいっぱいだったのだ。子供の中にある、自由にイメージの拡がる世界、到底、大人になる時まで持ち続けられない、その世界。それならば、なおのこと、彼らの思いを大切にしたいと思つた。

(千葉・愛隣幼稚園)